ライフケアガーデン熱川　別館

症　例　概　要　利用者：90代　女性　要介護5

病名　　：認知症、右大腿骨転子部骨折（2023.5月中旬）

2014年7月　入居　2023年5月に至るまでADLはほぼ自立（要介護1）で当施設の生活を楽しまれていた。

2023年5月　着替えの際に転倒し右大腿骨転子部骨折を受傷。

手術、入院するも自立歩行から車椅子移動となりADLが著しく低下する。

加えて見当識障害とアパシー症状が出現し、服薬、食事、リハビリ拒否がみられた。

職員の働きかけによってアパシー症状とADLの改善がみられ、ご入居者に笑顔が戻った症例。

内　　容

受傷してから約1ヶ月後に退院するも、ADL、認知機能とも顕著に低下していました。人の顔と名前が分からず自発性は低下、食事介助に開口しないといった摂食障害もみられました。

理学療法士がリハビリ介入するも前向きに取り組もうとする姿勢は皆無で自ら身体を動かすことはほとんどなく、職員はご入居者のADL改善にはアパシー症状への対処が不可欠だと考え、人とのつながりと快刺激によって改善を試みました。

まずは看護、介護だけではなく施設管理や食養、事務職員による部署を越えた明るい声掛けを実施し、身体の具合や気分を伺うとともに退院したことを祝福しました。

また、不活発であることから介護職員は積極的に離床を促しましたが、ご本人からは拒否がみられたため根気強く傾聴と説得を行い、ご入居者の退院を心待ちにしていたこと、体調を心配していたことを伝え、日中は談話室で過ごして頂くようにしました。同時に他のご入居者にも元気な声掛けの協力をお願いし、ここに戻って来て良かった、再び当施設での生活を楽しみたいと思って頂けるよう、職員だけではなくご入居者も一丸となって明るい声掛けを実施し続けました。

さらに、毎週楽しみにしていたレクリエーションに引き続きお誘いし、車椅子でも当施設の生活を楽しみ続けることが可能だと実感して頂くとともに、季節の風に触れたり綺麗な景色を見る、好きだった童謡を流す等、五感に快い刺激を与えていくことを意識しました。

始めて2ヶ月程は反応が薄く、これ以上の改善は不可能だと思われる程でした。しかし、9月を過ぎた頃からご入居者に大きな変化がみられるようになりました。

周りのご入居者や職員と仲良く話して笑顔を浮かべるようになり、カラオケでは自らマイクを持って歌を楽しまれるようになるなど退院直後と比べると別人に見間違える程の変化で、アパシー症状が改善されたことにより理学療法士の積極的なリハビリ介入が可能となりました。

理学療法士はトイレや移乗といった身近な動作を例に挙げ、自立した生活をイメージして頂き興味のあるところからリハビリを実施することで確実にご入居者のADL改善がみられました。

ご入居者もまた、リハビリを繰り返すことで少しずつ身体が動くようになってきたことを実感しています。未だ車椅子での生活ですが、ご主人の形見である杖を使って歩行することを次の目標に設定し、前向きな発言を多く聞くようになりました。

突然の骨折、入院によって心身ともに著しく低下するも、職員及びご入居者の協力より沢山の親身な対応が生まれ人とのつながりと快刺激によりアパシー症状とADLの改善がみられ、素敵な笑顔を取り戻すことが出来た症例となります。